



学校便り 2月号

かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008
発行 令和6年2月19日 責任者 校長 永野 俊也

学校HP



学校ブログ



里周辺海水温
19℃(2/18)



銀の滴降る降るまわりに 金の滴降る降るまわりに アイヌ神謡集 と ゴジラ?

校長 永野 俊也

甌島と私をつないでくれたものは、民俗学者の柳田國男氏です。そして今月は、同じく民俗学者で言語学者である金田一京助（辞典や教科書の編纂でも有名）氏に見出された一人の少女のお話です。

昨年末の話ですが、鹿児島のお家に帰った際、久しぶりに映画を見に行きました。

作品名は「ゴジラ-1.0」
→の出現によりマイナス
架空の話ですが、戦争を



太平洋戦争で人々の生活が 0（ゼロ）に叩き落とされたところへ、
というさらなる絶望の淵へ落とされるという設定です。もちろん
実際生き残った重巡「高雄」 や 駆逐艦「雪風」「響」それに

試作機 1 機のみ作られ終戦を迎えた



「震電」などが、リアルな世界に引き込んでいきます。

そして、ゴジラといえばあの音楽！「ドシラ、ドシラ、ドシラソラシドシラ…」ゴジラのテーマは、歌うと「ドシラ」なんです。4拍子と5拍子が交互に繰り返す変拍子の不安定さが、より恐怖心をかき立てます。作曲者の伊福部昭氏は、北海道出身。ほぼ独学で作曲を学びました。北海道大学の農学部林業科を卒業し、森林事務所に就職しながら後に作曲家に転じ、日本クラシック音楽の巨星と称されるようになった方です。その作風は、アイヌの人々への共感とノスタルジーにあふれ、日本の民族性を追求した強烈なリズムと野太いサウンドに象徴されます。意味深な映画のラストの後、エンドロールで畳み込むように流れるゴジラのテーマ。「アイヌの音楽こんなに怖くないけど、変拍子や同じパターンを繰り返すところとか、やっぱり影響があるんだろうなあ」そんなことを考えながら、家に帰りました。

「そういえば…」と、大学時代に「なんてきれいな言葉なんだろう…」と思わず買った本を思い出し、書棚から取り出し、久しぶりにページを開いてみました。「銀の滴降る降るまわりに…」それが、アイヌ神謡集です。

アイヌの人々は、最近になり北方における日本の先住民族として法律で規定され、その文化が保護されるようになってきました。ただそれまでは、多くの苦難の歴史を背負っています。アイヌの人々の考えは、自然界全てのものに心があると考え、それらをカムイと呼び、それら自然と対する自分たち人間をアイヌと呼んでいました。争いごとを好まず、自然に感謝しながら狩猟採集民族として北海道を中心につつましやかな生活を営んでいました。また独特の文様を多用する文化を持っていますが、母語のアイヌ語は文字を持たず、アイヌの歴史や文化は全て口承で伝えられてきました。それが明治となり学制が発布されると、アイヌの人々も日本語を強要され、文字を持たないアイヌ語は次第に消滅していきます。そんな中金田一氏は、アイヌの価値観・道徳観・伝統文化等を子孫に継承するために重要な口承叙事詩“カムイユカラ”の記録に走ります。カムイユカラの語り手を祖母に持つアイヌの少女知里幸恵と出会ったのは、幸恵が 15 歳時です。幸恵はアイヌ語も日本語も堪能であり、金田一氏のアイヌ伝統文化への尊敬の念を感じ、カムイユカラを「文字」にして、後世に残そうという金田一氏の要請を受け、アイヌ語をローマ字で書き留め、それを日本語に訳す作業を続けていきます。幸恵は重い心臓病を患っていましたが翻訳作業を続け、全ての作業が大正 11 年 9 月に終わり、「アイヌ神謡集」は完成します。しかし、完成したその日の夜、幸恵は 19 歳という若さで心臓発作のため亡くなってしまいます…。

頑張りました！ 校内縄跳び大会

1月23日（火）は、下学年と上学年に分かれて、校内縄跳び大会がありました。

子供たちは、これまで練習してきた様々な技に取り組み、自己記録に挑戦しました。

保護者の方々を前にして、これまで、朝の時間や体育の時間に努力してきた成果を発揮しようと、みんなが真剣に、集中して取り組むことができました。

保護者の方々におかれましては、寒い中応援いただき、有り難うございました。



来年度に向けて!

1月30日（火）に、来年度入学予定の年長さんの体験入学及び入学説明会がありました。体験入学では、一年生が学校を案内したり一緒に遊んだりして交流を深めていました。



2月1日（木）に、里中学校で、来年度入学予定の6年生を集めてわくわく座談会と入学説明会がありました。子供たちは、中学生との交流を深め中学校入学に向けて気持ちを高めていました。



3月行事

- 1日（金）6年生を送る会（3校時）
- 4日（月）卒業式練習（3校時）
- 6日（水）委員会活動（反省）
- 7日（木）かのこゆり号来校（返却）
- 8日（金）卒業式練習（3校時）
委員会活動（編成）
- 9日（土）土曜授業日
- 11日（月）シェイクアウト訓練
- 13日（水）卒業式予行練習（3・4校時）
- 19日（火）卒業式準備（3・4校時）
- 20日（水）春分の日
- 21日（木）卒業式練習（3校時）
- 22日（金）第77回卒業式
- 25日（月）修了式 離任式

南日本作文コンクール入賞

今年度の南日本作文コンクールでは、残念ながら学校賞はのがしたものの、下記の友達が入賞しました。

- 4年 池田 妃寿 三席
- 5年 山下 敬斗 二席
- 6年 石原 美空 入選

「アイヌ神謡集」の出版は、絶滅の危機に追い込まれていたアイヌ伝統文化の復権復活へ重大な転機をもたらし、それはやがて各国語に翻訳され、世界中に広がっていきます。地球史上ほかに類を見ない、1万年以上戦いのない平和な時代を築いた日本の縄文期にも通じるアイヌ文化。自然界の畏怖の象徴とも言えるゴジラ。それを人類文明の象徴と言える核兵器により突然変異させ、恐怖に叩き込まれる人類…。戦争がやまない今の世情を考えたとき、アイヌの一人の少女が残した詩は、私たちの心へ多くを伝えていく気がします。小学校の図書室にもアイヌにまつわる絵本が3冊収蔵されています。是非、親子でご覧になってみてはいかがでしょうか。

今月の付録

海との共生 甌島の海のお話



きびなごのひみつ (その5)



「きびなごのひみつ」今月が最終号となります。それでは、本題に入る前に きびなご（以降カキ表記）の生態についてまずふれておきたいと思います。

キビナゴは、インド洋と西太平洋の熱帯・亜熱帯域に広く分布していますが、外洋に面した水のきれいな沿岸域を好みます。（←この条件に甌島はとてよよく当てはまります。）主に海面に近い表層に大きな群れを作り回遊し、動物プランクトンを食べて成長します。その寿命は、半年～1年ほどと見られています。

またキビナゴは、水温 18℃以上で産卵が可能で、甌島を含む西日本では4～10月が産卵期となります。産卵前の集団は、潮の流れの速いところを集り、それから波の静かな内湾や入り江に入ります。そして砂地帯の海底を泳ぎ回り、粘り気があり海底の砂にくっつく卵を生みます。そして砂粒に混じった状態で1週間ほどでふ化します。

この産卵についても熱帯では、体が大きくなる前に成熟して回遊することなく産卵してしまうので、美味しいキビナゴは育たないようです。つまり水温の条件も、ここ甌島は、最適と言えるのだと思います。甌島西の浜沖（荒人崎周辺）は、キビナゴにとってよき産卵場所となっているそうです。

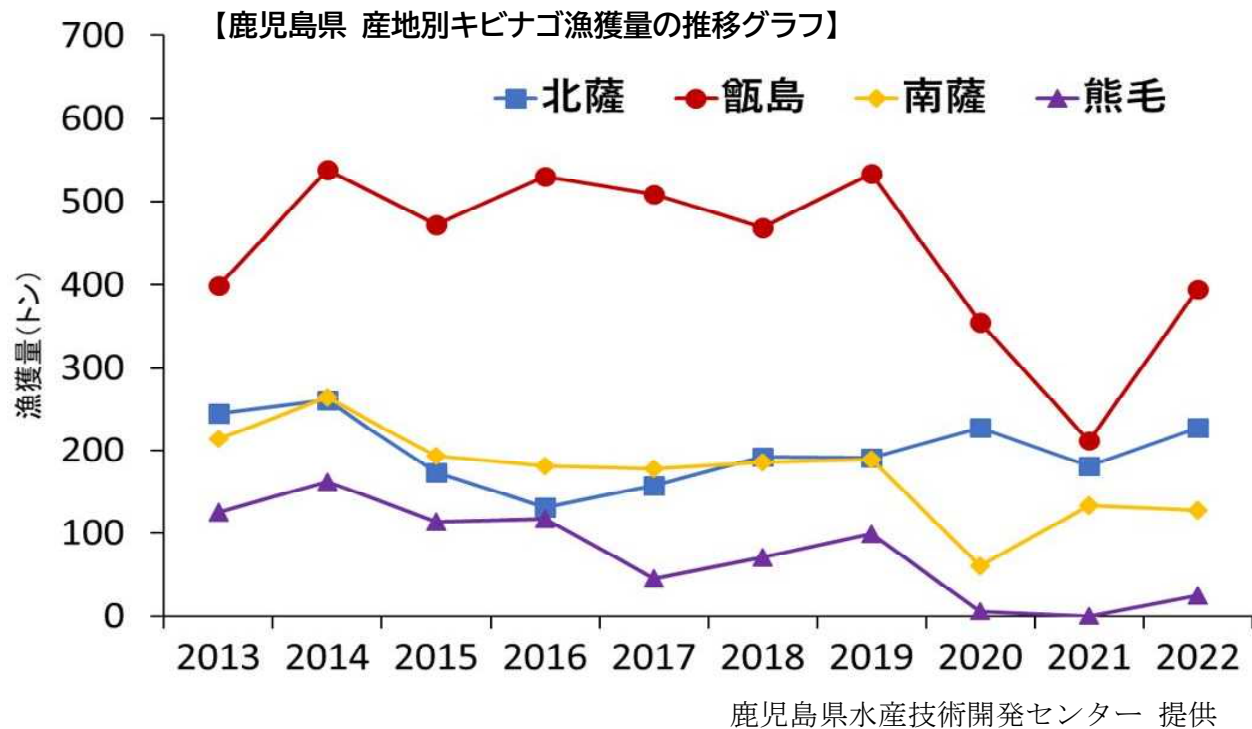
キビナゴの産地として鹿児島県は国内トップクラスの漁獲量を誇りますが、鹿児島県産のほぼ半分が甌島産であるというのもうなずけます。

次に成長に伴うキビナゴの動きですが、産卵場所からあまり離れず近海を泳ぐ周年のグループと、潮の流れに乗って遠くまで回遊する2つのグループに分かれます。県水産技術開発センターの地道な研究によると、九州のキビナゴ産地である長崎県五島列島、鹿児島県甌島や阿久根、種子島は、同じ遺伝子のグループであり、何らかの交流があると考えられるそうです。

また、黒潮沿岸である高知県や和歌山県もキビナゴの産地ですが、そことの関連はデータがなく、まだよくわからないそうです。

（昔、種子島の漁師さんから、「キビナゴは甌島で生まれて、枕崎沖から屋久島、種子島を回り、高知県や和歌山県まで回遊して、また甌島まで戻って産卵するから、甌島には1年中キビナゴがいるんだよ。」と話を聞いたことがあります。しかし、往きは流れに乗ればよいけど、復路は黒潮の流れに逆らって帰って、キビナゴの泳力や生育期間を考えると無理じゃないか??? と今回思いました…。が、よくわかりません…。）

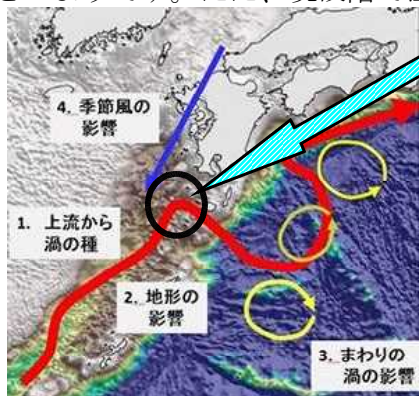
生まれてきたキビナゴは、産卵期の前半(4~6月)に生まれた春生群と、後半(7~10月)に生まれた秋生群に分けられます。春生群は成長が早く、みんなほぼ同じ成長をするのに対し、秋生群は、成長に個体差があり、成長の早いもの、遅いものが混在するそうです。



鹿児島県水産技術開発センター 提供

さあ、ここまで生態についてふれてきましたが、いよいよここから本題に入ります。では、ここ数年のキビナゴ減少の原因は何なのか？ 科学的な統計データは、漁獲量の増減に関わる要因として、次の2つは関連がありそう…と示していました。1つは、**冬季の低水温** もう1つは、**黒潮の接岸** です。

1つ目の冬季の低水温については、甌島周辺の冬場の水温が低くなりすぎると、秋生群で成長の遅い小さいキビちゃんたちは体力がなく冬を越せずに結果、数を減らしてしまうのでは…？というこのようになります。ただ、現段階で温暖化の傾向が進んでいるため、これを大きな原因とするのは難しそうです。もう1つの黒潮の接岸とは、



黒潮が接岸すると黒丸部分周辺への黒潮由来の暖かい水の流入が強くなります。すると、甌島から種子島・屋久島方面へ回遊していたキビナゴたちは、ルートを失い散らばってしまい産卵場所にたどりつけず、その結果数を減らしてしまうのでは…？というものです。ただこれについても、散らばったキビナゴたちが、その後どうなったか、さらには元々本当に種子島まで回遊しているかなど不明な点が多いのも事実です。

そもそも1年で一生を終える1年魚は、ちょっとした環境の変化で数が急に減ったり増えたりしやすい繊細な魚です。地球温暖化の影響で、北の方に行っちゃったのでは？ との見解についても、長崎などの漁獲高に大きな変化がないので、そんな単純な話ではないと言えます。産卵場所の環境や、キビナゴが食べる動物プランクトンの状況。はたまた、美味しいとって私たちが食べすぎちゃった？ 等々もっと様々な事が総合的に複雑に絡み合っていて、まだまだ多くの謎に包まれているということが、調べてみて行きついた結論です。

今回訪ねた指宿にある県水産技術開発センターでは、私一人のために研究員の方を中心に二人の方が、2時間弱、パワーポイントを使い丁寧に貴重な研究データを示しながら解説をしていただきました。今回の文章は、その解説からの転用が大部分を占めています。また、キビナゴの研究についても、耳の骨のひだを数えたり、細胞から DNA を解析したりと一つのデータを取るのに、膨大な時間と労力を重ねていると知りました。県の漁業を支える研究拠点として、日々の努力に敬意を払うと同時に、深く感謝する次第です。ありがとうございました。

柳田國男氏は「甌島は民俗学の宝庫ですから、歴史と文化を学びなさい」というメッセージを私に残してくれた気がしていました。そして、甌島の海は、「私たちはまだまだ多くの謎に包まれているんですよ。さあ、どう歩むんですか？」とその魅力で誘うとともに、問いを投げかけている気がします。いかがでしたでしょうか、これからの時代を拓いていく若い人たちは、より多くのことに興味を持ち未来を拓いてもらいたい。そのために、多くのことを学ぶ歩みを大切にしてもらいたい。そう思います。

海との共生 甌島の海のお話 きびなごのひみつ [完]